

CURES NEWSLETTER

地域経済
ニュースレター

2000. 3. 1 No.52

藤田教授・平館教授退官記念号

組織問題にかかわる最近の二つの風景

藤田 暁 男



第一話ー中央公園にて。中央公園は10時だと言うのにやや薄暗かったが、中心部の舞台は背広の若い人達の熱気で華やいでいた。1999年秋の金沢NPOフェスタは小雨模様の中で始まった。舞台前の大型テントを囲むように

して色々な団体のテントが並び、その端の一群にはラーメンやおでんの屋台まである。10月にしては寒い。環境ネットワークのコーナーでハーブ茶が湯気を上げて人を待っていた。魅力的な中年のご婦人が、自然を思い起こさせる香りのお茶を入れてくれた。庭で取れたのだと言う。そのハーブが腹に沁みて心地良い。このフェスタは、NPOとは何かを市民に知ってもらおうと

組織問題にかかわる最近の二つの風景.....藤田 暁 男

思い出すままに.....平館 道子

■ CURES Report

サッカーW杯で日韓に問われる評価は盛大 衛

■ CURES Topic

特養ホーム 4月から予想される新たな問題...国 光 哲 夫

金沢大学経済学部

諸NPO団体の実行委員会が開いたものだが、オルガナイザーの中心は中小企業の次世代を担う青年達である。多様なNPO団体を実行委員会として「共感と信頼」の協同体に纏め上げて行くには、それなりの学習と社会的な努力が必要であった。彼等は、環境ネットワークが、子育てグループが、ドラマ工房等々が何を指向し、何を考え、どんなパーソナリティを持っているかを直接知る機会を持った。それは彼等自身が言うように、これからの社会の在り様を知る重要な契機ともなるであろう。また、諸団体が相互に連携しようという気運を盛り上げる機会ともなったことは言うまでもない。ただ、労働者団体との連携が実現できていないのは残念である。

会場の端の方に手持ち無沙汰に座っていた福祉機器・介護ショップの青年と会話を交わす。多くの施設で使われずに放置されている機器が少なくない。もっと地元の機器を使えば修理や改良も容易になる。将来も利益はあがらないが大事な仕事だと思っている、とのこと。その他、ユニセフやまちづくり団体等、いろいろな人と言葉を交わした。寒いので、アジア関係のボランティア団体の出店でアノラックを買って着込んだ。昼食は屋台のラーメンにソーセージ。舞台では、いろいろな団体の紹介が続いていた。この天候にかかわらず結構若い人が出てきているのはうれしい。

会場中央部付近に県庁のNPO相談コーナーが設けられ、休日にもかかわらず職員



最終講義中の藤田先生

2人が夕刻まで対応していた。有力な参加団体である金沢市民芸術村のドラマ工房の人達が相談に来ていた。そのリーダーと話す。これまで演劇好きの仲間の集まりとしてやって来たが、世帯もやや大きくなり、やることも多様になったので組織整備が必要になってきた。NPO法人も考えてみたい、とのこと。我々が話している周りで、工房の人達が軽く合唱をしたりしながら、にぎやかに会話をしている。私は学生時代の懐かしい演劇部（私はミラーの「セールスマンの死」やモリエールの「気で病む男」等を演出した）の雰囲気思い出した。舞台の方からプロの歌うアリアのような見事な歌声が聞こえてきた。NPO法人第1号介護グループのリーダーのプレゼンテーションである。公園の森にはいつしか黄昏がせまっていたが、むしろ若者が増えてきた。ライブが始まったのだ。ロックバンドの響きが木々を揺すり、人々のシルエットがそれに合わせて踊る。そろそろ私は引き時である。出口の方へ向かうと、途中で誰

かが「ご苦労様」と声をかけた。寒かったが何か心温まる1日だった。今、これらのグループを中心にNPO活動推進センター造りが始まっている。

第二話—小さなビルの一室にて。庶民感覚にあふれた人達がワーカーズコープを作り、コミュニティケアをやろうと小さなビルの一室に集まった。出してある小さな机に皆が押し合うように顔を揃える。話し合いが始まって間もなく、ある会社を退職して活動してきたリーダーの1人が激しい口調で、中央から来ていた労働者の連合組織のオルグの態度を批判し始めた。地元の実情に合ったNPOを作ろうと努力を重ね、一定の人々が参加し実績も出てきつつある。そこへ中央の方針を上から持ち込もうとすると、自分も、地元の人もついて行けない

というのだ。オルグは、組織としての援助をするからには一定のアイデンティティが必要だと考えている。さらに、このリーダーの退職前とこのオルグの組織文化の違いが両者の関係を一層複雑にしているようだ。私は両者の間を暫く凍結してまた話し合うことを提案したが、結局、折り合いはつかず、リーダーは離脱を告げて退席した。彼と一緒に活動してきたこの会合の招集者である同年配の女性リーダーは、机に顔を伏せてしばし声を抑えて肩をふるわせた。それは悲しみの中に人間の真実味の持つ力強い美しさを宿していた。今、この女性リーダーを中心に再び態勢を整えて一からの組織造りが始まっている。

(金沢大学経済学部教授)

思い出すままに

平 館 道 子



金沢大学には29年6ヵ月お世話になりました。1970年の秋に赴任したときには、何の縁故ももたない金沢にこれほど長く居住することになるとは思ってもいませんでした。当時はま

だ法文学部経済学科で、法文学部には女性の先生はいませんでしたし、どう取り扱ったらよいかわからないという雰囲気、一日中会話をしなかったという日がよくありました。私の研究室は四階建の棟の三階にありましたが、そこには女性用のトイレもないという状態でした。法文学部は当時、哲学、史学、文学、法学、経済学の5学科